

万事塞翁が馬

佐山 浩二

愛媛大学名誉教授

私は生まれも育ちも愛媛で、医学部も愛媛大学、入局も愛媛大学だったので、ずっと愛媛を拠りどころとして過ごしてきました。とくに地元愛が強いというわけではないと自分では思うのですが、人生の岐路にあたっては愛媛を選択してきました。学生時代のバックパッカー半年、大阪大学(以下、阪大)国内留学1年半、米国留学2年半の合計4.5年間は愛媛にいなかったことになりますが、残り60年余りを愛媛で過ごしたことになります。

I. 学生時代はバックパッカーで留年

1977年、いまでいうバックパッカーとなってインド、中近東、アフリカを半年間旅行しました。当時はもちろんインターネットもなく『地球の歩き方』もない時代で、成田空港も開港前だったため羽田から出発しました。陸路でアジアからヨーロッパに向かう場合、旅行可能な経路のもっとも東に位置するのがコルコタ(当時はカルカタ)だったので、バンコク経由でコルコタに入りました。コルコタに到着した日のことは一生忘れられない強烈なイメージとして蘇ってきます。夜間コルコタに向けて飛行機が高度を下げていくと、街にはどういうわけか一面オレンジ色の光しかみえませ



写真1 1977年、ニジェール―アルジェリアの国境付近、サハラ砂漠のど真ん中

ん。入国審査官は密輸業者からチップのように賄賂を受け取るいい加減さで、コルコタ市内に入ると人力車が行き交う混沌とした喧騒の街で、オレンジ色の光の正体は裸電球だったことが判明しました。暑さも加わり半ば放心状態で1週間ほどコルコタに滞在した後、気を取り直して陸路で中近東、アフリカを目指しました。いまでは訪れることが困難なアフガニスタンや南スーダンも当時はのんびりした雰囲気で、盗難以外にはそれほど身の危険を感じることはありませんでした。旅の最後は、ナイジェリアからサハラ砂漠を北上(写真1)した後、アルジェリアから地中海を渡ってフランスに入り、パリから帰国しました。パリでは所持金が底をついていたので、カメラを売って帰りの旅費にあてました。

なんのために旅をしたのかと問われると困りますが、あるドクターから「それは自己のidentityを求める旅ですわね」といわれて、そんなものかなと思っています。

II. 補体から始まった研究生生活

学生時代は山岳部に属しており、愛媛大学初代皮膚科教授の三木吉治先生が医学部山岳部の顧問で、飲み会でお世話になっていました。結局それがご縁で三木先生が主催する皮膚科学講座に入局することになりました。三木先生には皮膚科の臨床・皮膚病理を教えていただき、それが現在の私の基礎となっております。

私の研究歴は補体から始まります。皮膚科で補体というと自己免疫性水疱症におけるC3の沈着くらいしか関連がなさそうですが、入局当時は白石聡助教授から実験の手ほどきを受け、補体の研究を始めました。白石先生は補体成分C4bpの発見者なのです。しかし、はりきって国内留学先の阪大微生物病研究所の井上公蔵教授にご挨拶にうかがうと、いきなり「これからの補体の研究は落ち穂拾いやからな！」(つまり研究の余地があまり残っていない)といわれ、がっかりしたの

を覚えております。白石先生、井上先生ともに若いころには補体成分が次々と発見されていた、たいへんいい時期に研究をされていたのだと思います。気を取り直して「免疫複合体が補体の活性化で可溶化するメカニズムの解明」というテーマで研究を始めました。しかし、国際学会の発表まではしたものの、結局このテーマを論文にまとめることはできませんでした。仕方ないので、愛媛大学に戻ってから補体に関する別のテーマ(C3a, C5a)で博士論文を書き『British Journal of Dermatology』に掲載されました。このときはなんと投稿後revisionがなく一発acceptでした。生まれて初めての論文投稿だったので、こんなものかと思いましたが、後から考えると非常にまれなできごとだったと思います。

補体が縁となり、米国カリフォルニア大学サンディエゴ校皮膚科のIrma Gigli教授の元に留学することになりました。Gigli教授の研究室は皮膚科でありながら、補体の研究をするという研究室でした。スクリプスクリニック研究所にある補体の大御所の研究室から抗体を供与され実験をしていましたが、後に肝心の抗体の特異性に疑問符がつくこととなり、この研究も中途半端なままに終わってしまいました。

そのままではあまりに残念なので、帰国後に別方面から抗体を入手して角化細胞に補体の制御分子であるCD46, CD55, CD59が存在することを見出しました。それぞれ論文にまとめることができ、米国での研究に一区切りをつけることができたと思っています。以後、補体の研究をすることはありませんでした。

III. 細胞死から角化細胞の研究へ

補体を研究していた関係で細胞死について興味をもっており、帰国後は角化細胞の細胞死について研究を始めました。当初は細胞障害性のリンパ球から出されるperforinに注目していました。なぜ、perforinかというと、perforinは補体成分のC9と共通抗原性をもっており、補体と同様のメカニズムで細胞を障害すると考えられていたからです。免疫染色でお茶を濁していましたが、そのうち角化細胞がアポトーシスすることを見出しました。後に橋本公二先生が愛媛大学に着任されてからは、ヒト培養角化細胞を用いた研究の指導を受けることができましたので、細胞死の研究を角化細胞の細胞内シグナル、自然免疫の研究(写真2)に発



写真2 自然免疫の研究者。左から長谷耕二先生(現・慶應義塾大学教授)、Richard Gallo先生(カリフォルニア大学教授)、村上正基先生(現・愛媛大学特任教授)、筆者。2003年、内藤コンファレンスにて

展させることができました。

橋本先生の時代は研究に集中した時期で、米国研究皮膚科学会(SID)のOral発表を死守せよというのが橋本先生の命令でしたので、夜遅くまで実験をして学会抄録を書いておりました。当時の愛媛大学の白方裕司先生、山崎研志先生、花川 靖先生、徳丸 晶先生と一緒にSIDに参加してポスター会場でビールを飲みながらああでもない、こうでもないディスカッションしていたのを懐かしく思い出します。

いまから考えると、このときは研究だけしていればよかったのでたいへん恵まれた時期だったと思います。私の場合、臨床に直結する「この疾患における〇〇を解明したい!」というような一貫した研究の動機づけはなく、そのときどきに興味をもったことを研究していました。自分では面白いと思ってやっていたので、研究は趣味のようなものだと思います。結局53歳までマウス小屋に足を運び実験をして、筆頭著者として論文を書いていました。

IV. 出張と輪行

話は横道にそれますが、少し自転車のことを書いておきます。40歳ごろからマウンテンバイクでサイクリングを始め、現在もロードレーサーで週末に時間があれば「しまなみ海道」をフラフラ走っております。

東京で研究会があると多くは週末だったので、宿泊して日曜日にモノレールで羽田空港に向かうわけで

すが、その途中に歩行者用の斜張橋がありその先にはスーパーと団地がみえました。後は帰るだけなのでぼんやりと眺めながら「この団地には一生行くことはないが、どんな生活をしているのだろう、なんてことない普通の生活かな」などと考えていました。が、あるときに「自転車をもっていけば行けるじゃないか」と思いつき、折り畳み自転車を担いで出張することになりました。自転車を飛行機に乗せて現地まで担ぐか(自転車を公共交通機関に載せて移動することを輪行という)、ホテルへ宅急便で送る方法もあります。公費で出張のときは事故に遭うとまずいので、公費以外の出張のときに限定していました。モノレール沿いのスーパーと団地はもとより、時間があれば東京周辺の川沿いや皇居周囲で自転車を乗り回しておりました。週末の都心は車が少なく、非常に快適にサイクリングができるのです。

V. 教授選のタイミング

40歳を過ぎたところに結婚式でスピーチをする機会があり、うんちくを垂れるべくはたと自分の人生を考えると、なんと健康寿命の半分以上を使ってしまったのに気づきました。当時は臨床、研究が面白く脂のりきった時期だったので、自分の人生を仕事中心に使うことに抵抗感はありませんでした。そのうち教授職を狙えるような立ち位置となり、他大学の教授選に応募したこともあります。ここで考えたのは子どものことです。だいたいにおいて教授になるような年代の人は、単身赴任だったりします。私も当時は家族ごと他県に引っ越すのは無理な状況でした。しかし、単身赴任するとなると、当時まだ小学校に入ったばかりの子どもを残していくことになります。そんなに長い期間ではないですが、この時期は一緒に過ごしたいと考えて、他大学の教授選に応募するのはやめました。ただ、教授選は椅子とりゲームのようなものなので、タイミングを逃すと椅子は埋まってしまう。たまたま選任されましたが、選任されなかった場合に後悔しなかったかといわれると、多分したのではないかと思います。

VI. 専門医制度との戦い

教授のキャリアのうち後半は期せずして、日本皮膚科学会(以下、日皮会)の運営に深く関わることになりました。とくにライフワークようになっていたのは専門医制度に関することです。結果的にかかなりの労力を費やすことになりましたが、専門医機構の会議ではさまざまな先生方や厚生労働省のお話をうかがう機会を得て、研究とはまた異なるたいへん刺激的な経験をさせていただきました。と同時に、医療制度の中での皮膚科の微妙な立ち位置も痛感させられました。

専門医制度には10年以上関わってきましたが、問題点も積み残したままとなり、残念に思っています。最初は日皮西部支部推薦の担当委員として委員会に出席し、専門医試験の受験書類や、更新のための書類を審査しておりました。審査をしていると個人の資格に関わることなので想定外のこともたくさんあり、書類に関してお電話すると「訴える!」といわれたり、いきなり電話をガチャンと切られるなど、さまざまなことがありました。それらには慣れましたが、そのうちに専門医機構が基本領域で専門医制度を統一するという流れになり、東邦大学の石河晃教授と新専門医制度の設計を一から担当することになりました。そして、10年近く石河先生と一緒に戦って参りました(写真3)。皮膚科の場合、旧制度から新制度への移行に5年間かけることになったので、旧制度の体制も維持しつつ新制度も走らせる必要があり、その整合性をとるのに苦労しました。そして、2018年4月に新制度が始まると仕事は終わると思いきや、今度はシーリングの問題が出てきて、多方面にわたる調整が必



写真3 専門医制度を戦った戦友たち。左から2人目が石河晃先生(東邦大学教授)

要になり、さらに仕事量が増えました。

最初は、専門医の質をいかに担保し、かつ各基本領域専門医のレベルを同程度にできるかという、専門医制度としては至極真つ当な議論だったと思います。しかし、そこに医師偏在の問題を絡めてきたことから議論が変質してきました。専門医の質を担保する制度を、偏在解消のために使うことに根本的な問題があるわけです。私が現役の間には間に合わなかったのですが、やっと2023年4月に機構専門医の第1期生が誕生しているはずで、まだまだ問題はありますが、軌道に乗ってきたのでホッとしているところです。

VII. 思いがけず第121回日皮会総会を開催

皮膚科における最後の仕事を、思いがけず第121回日皮会総会という形で締めくくることができたのはたいへん光栄に思っています(写真4)。もともとこの総会は、故尹浩信熊本大学元教授がご担当の予定でしたが、2020年3月に急逝されましたため、急遽私が指名されたものです。総会は2022年6月の開催で、私は2022年3月で大学を定年退職しているのですが、最初はお引き受けしていいものかどうか迷いました。ただ日皮会の理事職の任期は2022年6月の総会までなので、理事という立場で会頭をするということでお引き受けすることになりました。たまたま、この話があった年の秋(2020年10月)には西部支部大会も控えていたため、西部支部大会と日皮会総会を同時に準備するということになってしまいました。しかし、残念ながら西部支部大会のほうはコロナの影響で完全オンラインとなってしまうので、主催校の負担の大きい部分、すなわち招宴会、懇親会を開く必要がなくなり医局員の負担はかなり減ったと思います。西部支部大会の配信は日皮会事務局から行いましたが、その場にいたのは私と村上正基事務局長、そして本部運営スタッフ2名の合計4名だけでした。すべての配信を終了し終えて、4名で寂しく記念写真を撮ったのを覚えております。

日皮総会のテーマは「SDGs(Sustainable Dermatology Goals) ー持続可能な皮膚科学の目標ー」としました。コロナの影響でどうなることかと思いましたが、幸いなことに2022年6月ごろにコロナの流行は小康状態となっており、現地開催も可能となっていました。参加者総数は約7,500名と第121回まででは過去最多となり、また現地参加も多く以前の賑わいを取り戻した感がありました。一方、医局員にとっては会頭不在のまま総会直前の準備をしてもらうことになってしまい、村上事務局長はじめ皆さんには申し訳なかったと思っています。ただ現在の日皮会事務局には高い学会運営能力があるので、大きな問題はないだろうとは考えておりました。総会後は再びコロナ感染の波がきて、打ち上げをすることもなく、また医局員に会って挨拶をする機会もなく終わってしまったのは残念でした。コロナの影響により学会運営は大きな影響を受けましたが、他方コロナにより学会のハイブリッド化が進むなど、かえって学会の改革が一気に進んだと思います。

VIII. 働き方改革は皮膚科にプラスか

医師の働き方改革が2024年に始まり、さらに2030年を過ぎたあたりから少なくとも頭数だけは医師の需要と供給の関係が逆転すると予想されているので、これから医師の働き方は大きく変わると思います。案外とこれらの要素は皮膚科にとってはプラスになるのではないかと密かに期待しております。



写真4 第121回日本皮膚科学会総会にて(2022年6月、京都)